



**JAPANESE
CIVILIZATION
INSTITUTE**

日本文明研究所

24-5 Sakuragaoka-cho, Shibuya-ku, Tokyo 150-0031
Tel: 03-5456-8082 Fax: 03-5456-8388
Mail: info@japancivilization.org
http://www.japancivilization.org/

ニューズレター No. **15** 2019年春号

2019年2月7日、日本文明研究所の第15回シンポジウムが行われました。「元号が変わる! 森鷗外から八瀬童子まで、日本近代と天皇制を読み解く。」というタイトルでパネルディスカッションを行ったのは、ジャーナリスト、ノンフィクションライターの石戸諭氏、NewsPicks CCO、NewsPicks Studios CEOの佐々木紀彦氏と、当研究所所長の猪瀬直樹氏。

4月1日には元号が発布され、5月1日に改元、新天皇の即位式が行われます。その直前に、元号のもつ歴史的な意味や、日本という国について、改めて考える時間となりました。その内容の一部を載録します。(『週間読書人』2019年4月5日発行第8284号ならびにWEB読書人より転載)



第15回シンポジウム報告

元号が変わる!

森鷗外から八瀬童子まで、
日本近代と天皇制を読み解く。

佐々木紀彦 × 石戸諭 × 猪瀬直樹

生前退位と オリンピック

猪瀬 平成の天皇陛下が譲位のご意向を公に示されたのが、二〇一六年夏のことでした。二度の外科手術に加えて八〇歳を超える高齢であり、体力面から象徴天皇としての重い務めを果たすことが困難であるということが、その大きな理由です。ただ

お言葉の中に、「皇室のしきたりとして、天皇の終焉に当たっては、重い殯の行事が連日ほぼ二ヶ月にわたって続き、その後喪儀に関連する行事が、一年間続く」ことが言及されました。このことは今回の生前退位の、重要なポイントではないかと考えています。

昭和の終わりを思い起こしてみると、昭和天皇のご病気について知らされたのが、昭和六三(一九八八)年九月のことでした。ソウルオリンピックが行われていましたが、自粛により、生中継がかなり減りました。東日本大震災が起こった二〇一一年には、花見は行われませんでした。二万人近い人が亡くなっていますから、当然の自粛行為だといえます。

また当時、僕は副知事でしたが、七月下旬の隅田川花火大会も、話し合いの結果中止しました。二〇一一年は国中で喪に服した年でした。

二〇二〇年には、オリンピックの祝祭空間が、日本にやってくることで予定されています。そこに自粛をよぎなくさせる事態が起こる可能性まで考えて、今上天皇は譲位を口にされたのだと思うのです。国家全体が喪に服することになる天皇崩御、

改元、即位という一連の儀式が、国
際的な祝祭空間となる二〇二〇年に
重ならないように、配慮されたので
はないかということです。

天皇の葬儀を御大喪ごたいさうといいますが、
明治天皇も大正天皇も昭和天皇も、
その御遺体は「朱漬け」になりました。
た。朱肉の「朱」です。そして明治
天皇は伏見桃山陵に、大正天皇と昭
和天皇は武蔵野御陵に土葬されてい
ます。天皇をはじめとする皇族が亡
くなったとき、陵墓まで棺を担ぐ役
割を担っていたのが、現・京都市左
京区にある八瀬村の人たちでした。

僕は一九八一年ごろ八瀬村を取材
し、八瀬童子やせのどうじという人たちに会って、
『天皇の影法師』という本を書きま
した。それまでは、柳田國男がその
著書で、比叡山の開祖である最澄が
延暦寺の雑役として使った「鬼の子
孫」だと書いた、ある意味伝説の人
びとでした。

大正から昭和天皇が亡くなるまで
に、六〇年以上経っているのに、大
喪の儀も八瀬童子の存在も、すっか
り忘れられています。ただそうい
う役割を担った人びとがいたことが、
僕の本で分かり、昭和天皇崩御のと
きにも、伝統的な儀式が行われたわ

けです。その時実際に担いだのは、
八瀬童子の装束を着た皇宮警察の人
たちで、八瀬童子会の会長らは、付
き添いで指導して傍らを歩いきまし
た。

八瀬村には、後醍醐天皇が足利尊
氏に追い詰められたときに、八瀬童
子が後醍醐天皇を神輿にのせて担ぎ、
比叡山を越えたという伝説がありま
す。そのときからの御恩と奉公の関
係で、八瀬村は長きにわたり、税金
を払わなくていい赦免地特権を受け
ることになります。

八瀬の人たちの日常の仕事は薪売
りでした。八瀬は畑が少ないため、
比叡山界隈の山に入り、柴や薪を刈
って京都の街に売りに行ったのです。
八瀬から十キロ程歩くと、京都市左
京区の端にある出町柳に至ります。
八瀬よりさらに奥は大原です。薪を
担いで京都の街中に売りに行く、八
瀬や大原の女性たちは大原女、ある
いは小原女こはらめと呼ばれました。八瀬や
大原はいつてみれば京都の街の燃料
基地で、同時に八瀬の人々は、天皇
の棺を担ぐ役割で、臨時収入を得て
いた。さらに天皇家との繋がりによ
って、わずかにもついていた田んぼの
税金を納めなくていいという特権を

得ることができた。そういう非常に
特別な村が存在したので。

先日、石戸さんが八瀬に行つてき
たということですので、最近の八瀬
がどうなっているのか、現地レポー
トをお願いしたいと思います。

八瀬村現地レポート

石戸 一月二十八日に八瀬に行つて
きました。出町柳からバスが一本通
っているのですが、一時間に一〜二
本という間隔です。京都駅から国際
会館という地下鉄の最終駅までは、
大体二十分ぐらい。そこからさらに
タクシーを使って二〜三十分という
場所です。

猪瀬 八瀬駅は大正時代にできて、
現在は八瀬比叡山口駅と名称を変え
ていますが、八瀬村全体のかなり端
にありますね。同じく大正時代に比
叡山に登るケーブルカーができた
た。日常的には、車を使って通うよ
うな場所ですよ。

石戸 訪れた日は、八瀬で新年最初
の念仏行が行われました。念仏を唱
えることで亡くなった方の供養をす
る行事ですが、八瀬の人たちが誰を

供養するかというと、後醍醐天皇か
ら昭和天皇まで、世話になってきた
と彼らが考えている天皇家の人びと
です。戦後は八瀬の地でも、免税特
権はなくなり、一般的な法制国家の
中に溶け込んでいったのですが、他
所とは違う風習や慣習はいまなお残
っています。

最近は観光地化していて、八瀬の
「かまぶろ」や、八瀬天満宮、赦免
地踊などについての、案内看板がで
きています。猪瀬さんが『天皇の影
法師』を書いて以降、歴史的な研
究が進み、伝説だった八瀬童子の実
態を資料から裏付けていく研究が進
んだため、いまでは八瀬童子は国の
重要文化財になっています。彼らの
伝えてきた資料や、非常に古い時代
の仏像など、その全てを現在は京都
市の資料館が管理しているんです。
かまぶろは、壬申の乱で大海人皇子
(後の天武天皇)がこの地で流矢を受
けた背の傷を癒すために、村人が献
じたと伝えられているものです。
「赦免地踊」とは、天皇によつて
税金を免除されている、そのことを
祝う踊りですが、平成十六年八月に、
美智子皇后陛下が赦免地踊をご覧に
なつて詠まれた歌が、歌碑になつて



猪瀬直樹所長

います。

♪大君の御幸祝ふと八瀬童子踊り
くれたり月若き夜に
歌碑にするほど、彼らにとつては
名誉なことなんですよね。

八瀬の主な産業は、林業です。山
とともに生活する習慣は変わっていま
せん。

八瀬童子会会長の玉川勝太郎さん
(七十八歳)にお話を伺いましたが、
八瀬童子会の存在意義は、天皇家に
敬意を払うこと、天皇家にご奉仕さ
せていただくことだと。その感謝と
敬意を忘れたら、八瀬童子会は存在
している意味がない、とのことでした。

戦後、それまで神だった天皇は人

間宣言をしました。国民にとつて、

皇族の存在や天皇の存在は、戦前と
戦後でその認識に一線が引かれてい
るといえます。ただ八瀬の人びとの
間には、そうした境がないように感
じるのです。イデオロギーを超える
ような、彼らの皇室観があると、そ
う思います。

猪瀬 精神的にはそうかもしれない
けれど、戦前には税金を払わなくて
よかつたものが、近代官制下では納
税義務があるわけですから、大きな
変化ですよね。

ただこの免税の仕組みは、むしろよ
く戦前まで維持されたと思います。
明治になったときに、近代国家に税
金を払わない国民がいていいのかと、
当然問題になりました。それで宮内
省が、八瀬村の代わりに税金を納め
るといふかたちをとつたのです。そ
の代り皇族が亡くなったときに、葬
式で棺を担いでくれと。そのときに
は一定の奉仕料を払うと、そういう
契約です。八瀬についてはただ伝統
を守ってきたというのではなく、金
銭が絡んでいたから真剣だったこと
もあるのです。

王政復古からの 新しい伝統

石戸 時代が明治に変わり、天皇が
東京に御所を移したとき、八瀬の人
たちは自分たちの境遇が変わること
を、非常に恐れたと聞きます。岩倉
具視ら時の政府要人に、これまで通
りに扱ってもらえるように、お願い
をしたと。一方で国にとつても、彼
らのような伝統を受け継いで暮し
てきた存在は、ありがたいものだった。
最近の研究では、八瀬と天皇家との
関わりは明治期に大きく変わったと
いわれています。というのも、八瀬
童子は伝統を守つて来たとはいえ、
後醍醐天皇のときから代々、棺の担
ぎ手をしていたわけではないのです。
それは明治期になって儀式として組
み込まれたものでした。

猪瀬 明治になって、王政復古が起
こりますからね。天皇を陵墓に埋葬
するのは、明治からです。江戸時代
は火葬でした。

石戸 伝統をそこで作り直している、
ということですよ。その再構築の中
で、宮内省としては八瀬童子を再
発見していったところがある。

猪瀬 火葬ならば、軽いですから、
数十人で輿を担ぐ必要がない。陵墓
も必要ない。江戸時代の天皇墓は京
都の泉涌寺せんとうじにあります。明治天皇の
桃山御陵は、古墳を模して作られま
した。王政復古で天皇の墓も古代に
戻った。つまり八瀬童子が、朱漬け
の天皇の棺を担ぐというのは、近代
になって作られた新しい伝統だとい
うことです。

他にも、八瀬の人びとは、宮内省
の奥勤めをしていたそうです。僕が
一九八一年ごろにインタビューして
聞いたのは、天皇のための櫓風呂に、
うんと熱い湯が入った桶を八個と、
中ぐらいの熱さの湯の入った桶を八
個と、冷たい桶を八個並べて、女官
が見ている前で、それらを全て風呂
に入れる仕事のこととか。あるいは
「おとう」と呼ぶ便所。天皇が用を
足した後、トイレの下の鍵のついた
抽斗を抜き、宮内省の侍医のところ
に持つて行く仕事とか。棺を担ぐの
も含めて、いつてしまえば汚れ仕事
です。でも非常に重要で、天皇の命
に関わるような仕事でもある。簡単
に誰にでも頼めるような仕事ではな
いんです。そういう仕事をするため
に、八瀬童子が常時十人程、皇居に



佐々木紀彦氏

勤めていました。八瀬は、百から二百人ぐらいの戸長がいる村ですから、十軒に一軒が公務員の仕事についていた、ということになります。そして大喪の儀のようなときには、百人単位で棺を担ぐという、臨時の仕事があった。いまでも、宮内庁の内邸で職員をしている人たちは、一定数いるのではないのでしょうか。

石戸 後醍醐天皇の命日は旧暦の八月十六日で、新暦だと九月十六日前後に当たりますが、早朝と夕方に正装して御所谷を参拝するという儀式が、未だに続いています。それぐらい、鎌倉時代から南北朝時代に生きた後醍醐天皇が、未だに彼らにとつてリアルな存在としてあり、そのぐらい天皇家と密接に繋がりに続けた、

ということですね。

猪瀬 天皇制はいま、伝説そのものです。昭和天皇が亡くなられたときには、八瀬童子を呼んで儀式を行いました。次も八瀬童子が呼ばれるでしょう。そうして伝統は繰り返し返されつなげていくのです。

僕は当時、京都に八瀬という村があるらしい、と耳にして、とりあえず行ってみたのですが、見渡してもどこに八瀬童子がいるのか、分からなかった。それで道を歩いていたら、八瀬童子はこの辺にいますか、と聞いたら、「僕だよ」と。その人のお宅にお邪魔して、「八瀬村記録」という部厚い手書きの記録も見せてもらいました。その記録は明治五年から戦前まで記されてきたものです。その方は師範学校を出て、地元の校長先生をしていたのですが、大正天皇が亡くなられたときに棺を担いでおられました。さらにその方の紹介で訪ねた家に、明治天皇と大正天皇の棺を、両方担いだという人がご存命でした。いろいろ話を聞きました。明治時代になつてからのほうが、八瀬童子の役割は大きくなったという事です。

森鷗外「元号考」

佐々木 ところで、今日のシンポジウムは「元号が変わる！」というタイトルなのですが、元号がもつ意味や、なぜ西暦ではなく元号が大事なのか、といった基礎的なところもお聞きしたいのですが。

石戸 先ほど王政復古の話が出ましたが、それがまさに「元号とは何か」という話に関わってきますよね。明治からの近代天皇制とは何かという話と、明治以降の元号の役割は、分ちがたく結びついている。

猪瀬 通底するのは、近代になつて伝統が復活しているということです。元号が一世一元になつたのは、明治からです。明治天皇の前の孝明天皇は、七回も元号を変えています。明治の前は慶応、その前が元治、文久……安政。むしろ、近代天皇制は古代から連続と続いている伝統と、イコールのものではないということなんです。

佐々木 未来を見るためには過去を知らなければいけないのですが、私は次の時代がどうなるのかというように、やはり興味があります。平

成の次の時代は、歴史の中でどう位置づけられると想像されますか。

猪瀬 明治時代がどういう時代だったのか、まずはそのことを知る必要がありますよね。繰り返しますが、近代は封建時代ではない、王政復古なんです。そして明治天皇からは一世一元になった。近代国家は建前上絶対王権で、王権とは時間を支配するものなのです。王が亡くなった瞬間に時間が変わる、そういう仕組みが近代国家になつて作られた、ということですよ。

いま我々が振り返ると、明治というとても立派な国家があつたように見えるけど、実際は慌てて作つた、ハリボテの天守閣だったわけですよ。憲法だつて慌てて明治二十二年に制定された。ドタバタの中で日清戦争も日露戦争も始まっています。安定しているわけでは決してなかった。

明治から大正期を生きた森鷗外が、亡くなる前の二、三年は元号の問題に取り組んでいました。いずれ次の元号を作らなければならないが、どうも明治期には慌てて作つたらしいと。鷗外は、「大化」以来の元号を全て調べ上げたのです。元号を使つ



石戸諭氏

ているのは日本だけではないので、周辺のアジア諸国で使われた元号までを一覧表にして、宮内省の便箋で二七〇頁にもなりました。これにより実は「大正」という元号が、過去にベトナムのアナンで使われていたということ、「明治」という元号も、昔中国で使われていたことが分かります。

森鷗外は、これまでどうしてこんなに基本的なことも調べていなかったのか、と憤慨します。これから作る元号は、過去に使われていないものにしなければいけない。

元号は、『四書五経』から二文字を抜いて作られます。形式的だからこそ完璧でなければいけない、と鷗外は考えます。

鷗外の最後の仕事が、「元号考」という論文です。鷗外は、宮内省の部下、吉田増蔵に後を頼み、大正十一年に亡くなります。吉田の家に保管されていた宮内省の原稿用紙には、元号の最終案が記されていました。

重要なのは、森鷗外が「形式は国家の要諦」だといったことです。いま、元号について話題になるのは、合理主義的な側面からだけです。

佐々木 西暦の方が効率的であるから元号は必要ない、という話ばかりです。

猪瀬 そもそも自分は合理主義だと思っている人でも、人生の全てが合理的かというところ、そうではないと思うんです。なぜ結婚式に神父を呼ぶのか。葬式に僧侶を呼んで、何を言っているか分からない経に、ありがたさを感じるのか。博多の山笠でも、岸和田のだんじりでも、何の実入りもないのに、ひと時の祭りのために一年を働いているようなところが、人間にはあるでしょう。合理的ではないものに、生活の何かを傾けるといえることが、人生にはあるんです。それと同じように、国家にも慶弔がある。

国家の慶弔とは何ぞや、と鷗外は

考えた。「元号考」の根幹にあったのは、神話は歴史ではない、という事実です。初代天皇といわれている神武天皇なんて存在しない。数えたら百二十七歳まで生きたことになるんです。神武天皇からの万世一系などというのは嘘じゃないか、と鷗外は思うわけです。

神武天皇と皇后の墓は、奈良県の橿原神宮にあります。仁徳天皇陵を模倣して、近代国家になってから作られたものです。三百の国だったものを一つの国としてまとめるために、国旗も国歌も必要だった。そういうものを取りあわせて、ギリギリ成り立っているのが国家で、その一角でも失えば全て崩れてしまうという危機感が、森鷗外にはありました。国を造る側に立って、元号というものについて考えていたのです。

元号とは何か 万世一系の歴史と 「かのように」

猪瀬 神武天皇の万世一系なんて嘘だと分かっている。その上で、万世一系をどう捉えるべきかということ

なんです。天智天皇や、『古事記』『日本書紀』は、六〇〇〜七〇〇年頃です。そのあたりからは史実で、現在まで一三〇〇年の歴史があります。第二次世界大戦の直前、昭和十五年は皇紀二六〇〇年といわれていました。二六〇〇年では史実の倍です。西暦はイエス・キリストが生まれた翌年から数えて一九四〇年なのに、二六〇〇年って、そんなわけがない。偽りの歴史の上に、いかにして国家を位置づけるべきかという問題です。

鷗外は「かのように」という小説を書きます。

石戸 「あるかのように」振る舞うという内容ですよ。

猪瀬 ドイツで歴史学を学んだ息子が、父親に日本の歴史は本当ではない、というわけです。父親は息子と深い話を避けるようになる。息子は悩み続けるわけですが、友人との間で、「アルス・オップ」「コム・シイ」という言葉を口にする。これが「あたかもかのように」という意味なんです。つまり嘘かもしれないが、そうであるかのように振る舞うことも必要だ、と。

石戸 鷗外自身、ドイツに留学して

西洋的な史学を学んでいますし、医者ですから、サイエンティフィックで理論的な事実認識をもっている。

でも真実ではなくとも、近代国家を作るために伝統を呼び戻さなければいけないところがある。たとえ捏造の伝統であっても、明治天皇こそが、日本の統治機構のトップにいるという意味づけと、それに繋がる歴史を再構築しなくてはいけない。そうしなければ、近代化が進まないことを承知の上で、「そうであるかのように」振る舞うということが、重要だと鷗外は考えた。

猪瀬 鷗外に代表される明治時代のインテリが、苦悩の中で結論を見出しているのに、現代の、元号が当たり前にある時代の人が、そんなものは合理的じゃないからいけない、などというのは、考えが浅いと思いませんか。

少し話がそれますが、アメリカの大統領選挙は、一年かけてする内乱です。かつて南北戦争が四年も続き、成人男子の四人に一人が死にました。そうした大きな内乱を越えて、権力の正統性が生まれます。そこから大統領選挙は、四年に一度の内戦を擬しているわけです。王を四年ごとに

選ぶという、王位継承戦争です。

日本は、選挙に勝った政党の中から、総理大臣が出てくるわけだけど、建前上は天皇という権威がそれが認めるといふかたちで、権力に正統性が与えられます。日本の場合、権威と権力が分けられているんです。

元号は、日本の権威を象徴するものであるわけです。天皇とともに元号があり、元号によって、権威に正当性が生まれている。

石戸 西暦とは違う時間軸で、空間と時間をコントロールする、という意味合いがあるわけですよ。僕たちも普段は元号など全く意識してないけれど、「平成が終わる」とか、「平成最後の」とか言われると、急に何かしなければいけないような気持ちになるぐらい、元号は生活の中に根ざしている。考えてみれば不思議なことです。

猪瀬 天皇の肉体と時間が一緒になっている、ということですよ。今回は、生前退位なので、例外ですが。本来は、天皇の肉体の消滅が、日本国の時間の消滅になって、元号が変わるといふのが、権威の象徴であり、今までの一世一元だった。昭和天皇のときも、今日は容体がどうで、

血圧はいくつ、下血がどうかとか、毎日報道されていきました。そういうプロセスを経て、個人の肉体の消滅が、日本国の時間の変更になると。

天皇と時代、王権と道化

佐々木 今回の改元は、どんなリセット効果を持つのでしょうか。やはり平成の次の時代がどうなるのか気になります。

猪瀬 作られたイメージでもあるのですが、天皇の印象と時代の印象は重なっていますよね。明治天皇は、大帝と呼ばれました。日清戦争、日露戦争に勝ったからです。本当は、明治天皇は日露戦争に参戦することを恐れて、反対したんです。ところが運良く勝った。

大正天皇は、病弱で頭が弱かったといわれます。議会で封書を丸めて望遠鏡にして覗いた、という伝説があるのですが、これも作られたものです。王は道化と紙一重であり、ある種、生贄でもある。その生贄の役割を、例えばプリンスに負わせることで、王権を全うするという做いが

あるということです。つまり大正天皇は、明治天皇の道化だったのではないかと。大正天皇が道化となることで、明治天皇の偉大さが増す。こうした光と影は、王権につきものなんです。

そう考えると、美智子皇后も、皇室に入ってから随分苛められていたでしょう。それも昭和天皇に対する、生贄の役割だったのかもしれない。王権が維持された。古い話でいうならば、素戔嗚尊スサノオノミコトや日本武尊ヤマトタケルノミコトは、荒ぶるプリンス、放浪のプリンスとして、日常に顕現する近親相姦やあらゆる暴力を、放逐する役割を担っていた。放浪のプリンスは、腐った時間を全て背負って去っていく。非日常を背負わされる立場の人間がいることで、王権の正統性が守られてきたのです。近代国家における王権も、常に生贄の神話を伴っているのだと思います。

余計な話ですが、いまは小室圭さんが、ある種生贄になっているのではないかな。

石戸 雅子妃に対する報道も、それに近いものがあつたかもしれませんね。



猪瀬 今上天皇と美智子妃は立派です。すからぬ。

今上天皇は重い歴史を背負っています。昭和二十三年の十二月二十三日に、東条英機を含む七人の戦犯が処刑されました。GHQは、皇太子殿下の十五歳の誕生日に処刑を当てたんです。今上天皇は太平洋戦争で、三百万人の自国民を死なせてしまった、という贖罪を抱えて生きてきて、フィリピンペリリュー島などで、慰霊の祈りをささげ続けています。そして美智子妃も歩みを同じくしてきた。非の打ち所がない、だからこそ海の王子が、必要以上に叩かれてるのだと思うんです。

石戸 いまの皇太子殿下も即位したら、平成天皇と対比されるのではないですか。次の時代も平成天皇の役割、つまり贖罪の歴史を背負って、慰霊することを求められるのか。

猪瀬 そうした役割を、どう担っていくかです。すね。

佐々木 今後も日本では、天皇は象徴であっても、国柄や流れを作っていくと思われませんか。

猪瀬 オリンピック招致のとき、日本という国をアピールするのに、どうしても天皇という存在が必要だと

思いました。他の国と闘って、オリンピックを勝ち取るために、この国に何が財産としてあるのかを考えたときに、近代の成熟国家であることに加えて、伝統的な皇室という存在しかない。それで宮内庁にいつて交渉しました。天皇あるいは皇室というものは、曰く言い難い、一つの日本のありようだと思っています。四月一日に新元号が発表されますが、そのとき我々は、どういう実感を得るでしょうね。

先ほど、それぞれの天皇にそれぞれの印象、役割があると話しましたが、次の天皇は、雅子妃が病気になるたときに一人で山に登ったりして、その印象は「耐える人」だと思ふ。石戸 その誠実さは、先代の立派さから、また別の方向に築いていくものがありそうですね。

猪瀬 平成の天皇陛下は、自分は火葬でいいと思っています。ということでは、朱漬けではないということですね。陵墓もいらないですね。皇后と同じ墓に入るともおっしゃっています。すね。天皇家というのはある種、祖先崇拜の元祖みたいなものですが、世の中に樹木葬とか散骨とか、いろいろな葬送のかたちが出てきて

いる。葬送や先祖供養に対する国民の意識の変化と影響し合っているように感じますね。日本の古い価値観を守っていくのが、天皇家の役割だとは思いますが、時代の流れで抗えない変化もあるのでしょうか。

石戸 八瀬童子について考えることも、近代日本とはなんだったのかを考える一つの手がかりなんですよね。伝統を再発見し、ある種作り変えていきながら、この国は成り立ってきた、森鷗外のようなインテリが真剣に悩むわけです。この国の伝統がフェイクだと知りながら、それをあえて引き受けることを選ぶ。あるいは夏目漱石であれば、ある種の個人主義に死んでいく。明治期のインテリは、考えに考えていたということですよ。

猪瀬さんがいったように、現在はフィクションなものはいらないという、ある意味合理的で刹那的な考え方が強い時代になっていますよね。でもそれだけでは割り切れないものを、合理主義者を標榜する人たちも感じていくわけでしょう。だから、「平成最後の」といったワードが行っている。ついに、「平成最後のクリスマス」とかいわれています。

が(笑)、元号は半分ネタにするぐらい日常に入り込んで浸透している。天皇について何かをいうにしても、このぐらいならば不謹慎ではないよね、といった合意が国民の多くの中で取れている。これはばかにできないと思っています。

佐々木さんが、次の時代がどうなるかを、先ほどから気にかけているのも、合理的に考えれば、平成が終わろうが、世界的にはあまり関係ない。でもこの国においては、平成という元号で、時代を考えたり、その次の時代を思い起こしてみようというのが、多数派だからなんですよね。改元によって、何らかの気分が変わる人が多くいる。その変化の中で、慰霊や鎮魂という戦後のもの、先の大戦をどう考えていくのか、他の価値観が出て来るのか。そのあたりは注目したいと思っています。いずれにせよゴールデンウィークも含めて、一時の高揚感のような祝祭空間は生まれるのではないのでしょうか。改元からオリンピックまで。ただ本当は、祭りの後こそ大事だと思うのですが。

猪瀬 改元と東京二〇二〇は、セツトになるでしょうね。災害や不況や、

様々なものを洗い流すときにもなるでしょうし、国家とは何かを改めて考えるきっかけになればいいと思います。

講演者紹介

佐々木 紀彦 (ささき・のりひこ)

NewsPicks CCO/NewsPicks Studios CEO

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年11月、「東洋経済オンライン」編集長に就任。2014年7月にNewsPicksへ移籍。2018年より現職。最新著書に『日本3.0』。ほかに『米国製エリートは本当にすごいのか?』『5年後、メディアは稼げるか』、共著に『ポスト平成のキャリア戦略』の著作がある。

石戸 諭 (いしど・さとる)

ジャーナリスト/ノンフィクションライター

1984年東京都生まれ。2006年に毎日新聞入社。2016年にBuzzFeed Japanに移籍し、立ち上げに関わる。2018年4月に独立。初の単著『リスクと生きる、死者と生きる』が読売新聞書評欄にて「2017年の3冊」に選出される。

猪瀬直樹 (いのせ・なおき)

作家。1946年生まれ。87年『ミカドの肖像』で第18回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。『日本国の研究』で96年度文藝春秋読者賞受賞。2002年小泉首相より道路公団民営化委員に任命される。07年6月東京都副知事に。12年12月に東京都知事に就任。13年12月辞任。15年12月に大阪府市特別顧問に就任。代表作に『昭和16年夏の敗戦』『ベルソナ三島由紀夫伝』『ピカレスク 太宰治伝』。近著に『救出』『戦争・天皇・国家』『民警』『東京の敵』『国民国家のリアリズム』(共著)『明治維新で変わらなかった日本の核心』『ニッポン2021-2050』(共著)。

『週刊読書人』二〇一九年四月五日発行第
八二八四号ならびにWEB読書人より転載)